

江戸絵画の華

出光美術館(丸の内・帝劇ビル9階)

第1部	若冲と江戸絵画	23.01.07～02.12
第2部	京都画壇と江戸琳派	23.02.21～03.26

奇想の絵師「伊藤若冲」の名を世界に知らしめたのは、アメリカ人コレクター「ジョー・プライス」氏で、江戸絵画を中心とする夫妻のコレクションのうち、「約190件」が2019年に当美術館に収録されて今春には公開される。



円山応挙《虎図》1785年 左図一部

実物の虎猫を観察することが出来ず、猫を参考にして紙幅からはみでるほどの虎の姿をクローズアップした作品は、想像を巡らせて描かれた百獣の毛並みが忠実に描かれた超絶技巧であるが、瞳孔が細くて表情がどこか愛くるしさがある。

<第1部> 若冲と江戸絵画

1. 生きものの楽園 — ようこそ、プライスのコレクションの世界へ
「伊藤若冲」 《鳥獣花木図屏風》 江戸時代



このさまざまな鳥や動物たちが群れ集う作品は、小さな枱目で画面を覆いつくす奇抜な技法が見る人の目を奪いがちで、この鳳凰と白象を中心にさまざまな動物や鳥、想像上の聖遺物を描いた作品は、一説によれば西陣織の下絵に想を得たといわれている。

<第2部> 京都画壇と江戸琳派

酒井抱一 《四季草花図 三十六歌仙図屏風》 江戸時代 左隻 紙本金地



江戸後期の琳派の巨匠の画伯が金地に描いた四季折々の草花を背景にし、「柿本人麻呂」などの36人の歌人の肖像を描いた色紙をちらし刷りにした賑やかな作品である。